「極端化する気候と生活 ―温暖化と生きる―」

吉野正敏　著
古今書院，2013年７月
216頁，3,500円（本体価格）
ISBN 978-4-7722-3152-7

著者はインターネットのバイオウェザー連続エッセイで広範な話題を提供し続けている．このエッセイをまとめてこれまでに「世界の風・日本の風」，「地球温暖化時代の異常気象」の２冊が上梓されている．本書は連続エッセイの「温暖化と生きる」シリーズの内容をまとめたものであり，連続エッセイの３冊目の著作である．本書も，これまでの著作と同様，幅広い分野での異常気象と地球温暖化との関連等の話題を取り扱っており，一読して色々と新しい知識を得ることが出来た．

著者は「はじめに」において，我々が体験する異常気象とグローバルスケールの現象とのつながりを解明することを目指して本書を執筆したと，執筆の動機を述べている．

先ず，本書の目次を示すと，

はじめに
序章　気候変動と暮らし
第一章　変動する寒波・大雪の様相
第二章　春から夏へ，移行季節と気候の変動
第三章　夏の天候の変動
第四章　風の認識
第五章　気象災害と気候変動
第六章　二〇一〇年の猛暑
第七章　異常高温と気候変動
第八章　気候変動と生きる
第九章　東日本大震災と気候災害
第一〇章　気候変動下の外国の洪水と日本

となっている．

序章において著者は，本書の記述に関する基本的な立場を，「最近の地球温暖化は人間活動が大きく貢献しているとしなければならない．このような状況下における気候変動の実態を紹介し，それが暮らしにどう影響し，そして，どのように生き抜いていくべきかを述べるものである．」としている．このような方針で書かれている本書は，各章において，「これも温暖化に関係しているのか？」というような，非常に幅広い話題について，新しい考え方や，研究の必要性を述べている．

以下，順を追って，各章のトピックスを紹介する．

第一章では地球温暖化と寒波・大雪の関係について，最近の世界の例を引用しながら，その特徴を述べている．例えば，2008年の中国における大雪は，「異常気象」または「異常天候」ではあったが，「正常気候」の状態であるとの説を紹介し，この意見に同意している．しかし，中国では沙漠気候を含む多様な気候地域があるにもかかわらず，降雪日数は減少傾向にあり，一方，降雪量には減少傾向が見られないことに注目する必要があるとしている．さらに，今後の適応策として，温暖化した場合も，必ず大雪に見舞われ，その時の生活に与える影響は大きいことから，除雪計画や住民意識の確立などの備えを十分にしておく必要があるとしている．

第二章では春から夏への季節進行と温暖化の関係を，いわゆる爆弾低気圧を含む温帯低気圧の発生頻度・発達の度合いや，“三寒四温”の周期性の変動などで調べる必要があるとしている．さらに，植物季節観測の重要性と問題点を指摘するとともに，複数の季節現象を組み合わせて気候状態の変化をとらえる生物季節観測を提唱し，季節の科学の確立を訴えている．

第三章では夏の天候と温暖化の関係を，梅雨季の気圧配置を例に，著者の造語である「もどり梅雨」の考えを導入しながら，その可能性について言及している．また，帯広の年平均気温の長期変動を例に，気候変動の南北差や気候ジャンプについて解説すると共に，竜巻の発生件数，雷日数の変化，沙漠の水問題などと温暖化の関係について述べている．さらに，タンポポの生態に関する在来種・外来種と季節変化の関係などを調べることを提案している．

第四章では風と温暖化の関係について，近世の伊勢地方の台風の頻度を取り上げて，その可能性を指摘している．また，特に局地風と温暖化の関係を調べる必要性を指摘している．

第五章では気象災害と気候変動の関係について，特に異常気象が連続的に，あるいは同時に発生した場合，すなわち複合的な気象災害の研究の重要性を指摘している．さらに，2011年の台風12号による紀伊半島の豪雨について，地球温暖化の影響であるとの仮説を提示し，これに回答を与える気象学・気候学の構築が必要であるとしている．

© 2014　日本気象学会

第六章では2010年のヨーロッパ・日本における猛暑を取り上げ，その原因を温暖化による循環系の強化であるとしている．この章ではこのような猛暑が生じた場合の新聞記事の頻度や内容について分析した結果を示しており，非常に興味深い．さらに，これまでの猛暑年に生じた異常気象を調べ，複合的な気象災害の発生の危険性を指摘している．

第七章では異常高温と気候変動の関係について，特に都市における異常高温を取り上げ，例えば関東平野の熊谷における異常高温を引き起こすメカニズムや，都市におけるヒートアイランド現象の最近の変化について，新たな考え方を示している．さらに，気圧配置の長期変化を明らかにする総観気候学の重要性を指摘している．また，古代日本における高温と仏教との関係についてユニークな考えを述べている．

第八章では人々の生活と気候変動との関係を，例えば，個人消費，野菜・果物の値段，稲作，動物，水産業等を取り上げて，具体的に例示し，今後の取組の重要性を述べている．特に稲作の作柄については，最近は量より質に関心が移り，従前の作況指数は一般人の感覚からずれていることから，その意味・算出方法なども検討の余地があるとしている．しかし，ここで著者は，日本人のコメに関する関心の高さは，「温暖化の影響が世界の食糧問題にどうかかわるか」という観点とはかけ離れているのではと，警鐘を鳴らしている．

第九章では温暖化と直接は関係ないが，東日本大震災を取り上げ，「地震や津波の影響を受ける人びとは，気候変動下の時代に生きる人びとだ」という観点と，避難所のバイオクリマが重要であるとしている．また，本章では，発災直後からの被害の進行・調査・報道の速度等に関して，貴重な分析が行われている．今後の災害研究の重要な視点と考えられる．

第一〇章では洪水と気候変動との関係について，主に外国の例を取り上げながら，分析が行われている．特にこれまで余り注意を払われなかった外国における洪水等についても，グローバル化した現在，日本の経済活動等に直接・間接に影響を及ぼすことから，より関心を持って取り組む必要があるとしている．

このように本書は気候変動，特に地球温暖化と我々の生活との関連について，広範な話題について問題提起を行い，気候変動下に生きる我々に，より関心を持って温暖化に対応することの重要性を示している．

是非，一読されることをお勧めする．

インターネットのバイオウェザー連続エッセイでは，新たなシリーズ「暮らしの中のバイオクリマ」が連載されている．いずれこのシリーズも刊行されることを期待したい．

((一財)日本気象協会　藤谷徳之助)